

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名：後藤里菜

「中世キリスト教世界の〈叫び〉——『敬虔な女性たち』と一般信徒をめぐって」と題された本論文は、これまでほとんど本格的な研究がなされてこなかった中世キリスト教世界における〈叫び〉を主題として選び、多方面から論じている。そして〈叫び〉の意味・役割の変容を、中世盛期以降の新たな〈靈性〉の担い手であった「敬虔な女性たち」および一般信徒たちの集団的な宗教運動に注目しながら明らかにしていくとともに、中世盛期から中世末にかけての人間と神との関わり方の大きな変化を、〈叫び〉を通して浮き彫りにした。

本論文は、全三章および「はじめに」と「おわりに」で構成されている。

「はじめに」では、〈叫び〉がその一部をなす〈声〉と中世キリスト教世界との関係を概観し、関連する先行研究を検討してから、本論文の目的と構成について説明している。

第一章「救いの叫び、罪の叫び」においては、修道院の戒律や慣習律、修道士の伝記・著作、聖人伝、エクセンプラ集や奇跡譚、異界探訪譚など、多岐にわたる史料を——一部先行研究にもとづきながらも——〈叫び〉の観点から分析し直し、日常的に神に向かっていた修道士らと、その教えを受け取る側であった一般信徒に分けて、その意味を抽出していった。そして三つの特徴を見出している。

その一つは、中世世界で悲鳴や号泣などを含む音声を伴う激しい〈叫び〉には、〈罪〉や悪魔の存在を示す「しるし」としての役割が大きかったということである。聖人はその激しい〈叫び〉を〈祈り〉や聖性によって消滅させることができたし、そこで〈叫び〉は、「消滅する」ことによって、聖性の「存在」を示す役割を果たしたのである。

二つ目は、音声を伴う〈叫び〉は、一般信徒にとっては〈救い〉に繋がる中心的な手段であったということである。決まった〈祈り〉やイエス・キリストおよび聖母マリアの名前を「叫ぶ」こと、ならびに聖人に自らの願いを〈感情〉とともに「叫ぶ」ことは、そのまま〈救い〉をもたらす効果があった。また、一般信徒は悪魔憑きとなり、聖人の存在やその意図を「叫んで」明らかにすることで、〈救い〉に繋がる役割を果たすことさえあった。

三つ目として、紀元千年頃まで神により近い生活を独占していた修道士たちにとっては、〈沈黙〉こそが美德であり、音声を伴う〈叫び〉は、一見、積極的な役割を持たなかったが、人間が神に対して祈りまた讃える行為を示す言葉は、音声の有無に拘らず「叫ぶ」(“clamare”)であったことが指摘される。したがって、彼らにとっても、〈叫び〉は神と繋がる手段としての役割を欠いてはいなかったのであり、それが具現化したものとして、修道院の典礼的な「叫び」(“clamor”)儀礼の実態と

効果が検討されている。

第二章『敬虔な女性たち』の叫び——『新たな聖なる〈叫び〉』の展開」では、12世紀後半以降に出てきた新たな〈靈性〉と称すべき、〈身体〉と〈感情〉を通じて神と関わる方法の担い手、「敬虔な女性たち」の伝記における〈叫び〉に焦点を当てている。前期では、ワニーのマリ、クリスティーナ・ミラピリス、イーブルのマルガレータ、アイヴィエールのリュトガルド、コルニヨンのジュリアーナ、マクデブルクのマルガレータ、ディーニュのドゥスリーヌ、後期では、コルトーナのマルグリータ、フォリーニョのアンジェラ、リミニのキアラ、マルガレータ・エーブナー、マージェリー・ケンプなどが俎上に載せられる。

伝記から読み取ることができるのは、まず、彼女らが神への〈祈り〉としての〈叫び〉に対し、一般信徒にふさわしい〈感情〉のままの〈叫び〉を付け加えて展開させたことだとされる。さらに、受難のイエス・キリストへの敬心の高まりとともに、苦しむイエス・キリストや悲しむ聖母マリアへの共感にもとづく、激しい〈泣き叫び〉を日常的な信心業として定着させていったことにも触れられている。

ついで、聖なるものや〈罪〉に繋がるものに対し、〈身体〉を通じて「反応」する〈叫び〉に、「敬虔な女性たち」が新たな展開をもたらしたことが指摘される。〈罪〉となるものの存在に接して上げてしまう〈叫び〉は、彼女ら自身の聖性の「しるし」となったのである。また彼女らの活動の中には、神への訴えの〈叫び〉や「反応」の〈叫び〉を日常的に繰り返すことを、神との一体化という最終段階に至るまでの「過程」とする方法が見られた。すなわち「敬虔な女性たち」においては、〈叫び〉は、〈身体〉を用いた外的な行為であるとともに、内面をも変える「過程」を進むための行為となるのである。

さらに彼女たちは、神に向かって〈叫び〉を上げるのみならず、神から〈叫び〉を与えられることがあり、神の〈叫び〉ないし〈泣き叫び〉となることによって、すべてのキリスト教徒たちを〈救い〉に導く方法をも見出したとされる。その〈叫び〉は「神の意図」を表し、聖母マリアの悲しみを人々に伝えるとともに、回心を促す役割も持った。

第三章「一般信徒を含む集団的宗教運動と〈叫び〉」では、時代順に、「十字軍と少年十字軍」「アレルヤ運動と鞭打ち苦行運動」「ジェズアーティ会の運動とピアンキ運動」を取り上げて、そこでの〈叫び〉の意味・役割の変容を探っている。

そしてそれぞれの宗教運動における〈叫び〉の検討から、まず、〈叫び〉は集団的な運動が現れ始める紀元千年頃から中世末までずっと、〈救い〉に繋がる中心的な手段でありつづけたことが明らかにされる。叫ぶ相手は神や聖母マリア、聖三位一体など、運動によって異なるが、十字架や歌など、運動の基本的な要素と並んで〈叫び〉が見られたからである。

ついで、鞭打ち苦行運動、とくにドイツで展開したその第二期の運動においては、鞭打ちや罪に応じた姿勢での倒れ方など、神と繋がる方法に〈叫び〉以外の手段が見出された結果、〈叫び〉が相対的に重要性を減じる場合が出てきたことが明らかにされる。

そして三つ目として、中世末の集団的な宗教運動で〈叫び〉が中心的な身ぶりになる場合、そこに展開する〈叫び〉の性格は、第二章で明らかにされた「敬虔な女性」個人のものとおなじであり、その事実は、集団的な運動に現れる信心形態が個人化していることを示している。中世末には一般信徒が〈叫び〉以外の魂の救済に資する仕方を見出したのみならず、遠くの神に「叫ぶ」形態の集団自体が解体し、個々人が神と向き合うようになっていったのである。その中で「個人」が、神に近づくプロセスのうちの一環に組み込まれ、〈叫び〉の〈救い〉に繋がる意味が存続していったとの見通しが提示・論証されている。

以上の三章の紹介から窺われるように、「叫ぶ」(“clamare”)行為は、時代の変遷とともにその様相は変化したが、人間と神とを繋ぎつづけた。そして神が人間に〈叫び〉を与え、人間が「神の〈叫び〉」になるのは、そのもっとも進んだ段階だと位置づけられ、それが実現した時期は、〈救い〉の〈叫び〉の最盛期と言える。(身体)を通じた〈靈性〉の展開が顕著な中世盛期から中世末に焦点を当てた本論文は、その〈救い〉の〈叫び〉の最盛期に、〈叫び〉が神といっそう密接に結びつきながら人間と神を繋ぐ様子を、多様な史料をもとに浮き彫りにしたものと評しうる。

「おわりに」では、主要な結論を繰り返しながら論文全体をまとめるとともに、今後の展開の可能性を示唆している。すなわち、騎士道文学などの文学的史料も考察対象として世俗的な〈叫び〉にも範囲を広げ、〈感情〉表現との関わりを探る方向、神学者・哲学者らの〈祈り〉としての〈叫び〉や〈沈黙〉に焦点を当てる方向、より新しい時代へと考察を広げたり、北イタリアへと焦点を絞る方向などである。

本論文のように、徹頭徹尾〈叫び〉に注目して、関連史料・文献に当たった研究は、世界的に見ても存在しない。しかもそれを、キリスト教世界全体を対象に中世の全期間にわたって見通しスケールの大きな本格的歴史研究としてまとめたことには大きな意義があると、審査委員全員によって高く評価された。女性や一般信徒の〈声〉や〈叫び〉といった、史料に出にくいものを調べ上げて明快な構成で秀逸なるストーリーを作り上げ、〈叫び〉から心性の「変化」を見ていった本論文は、一見特殊なテーマを扱いながらも、西洋中世研究全般の発展に寄与することは間違いないであろう。

とりわけの地域と時代を定めた具体例を数多く取り出して 聖女の〈叫び〉を扱った第二章は、精密な分析と意味の解明、そして議論のダイナミックな展開が素晴らしく、オリジナリティーが高いと多くの審査委員が指摘した。「敬虔な女性たち」が、〈身体〉を通じて「欠如」を感じ取れるほどの「聖性」を持っているからこそ上げられる〈叫び〉が、〈叫び〉の意味を変えていく、とのテーゼはじつに魅力的である。

かように、非常に優れた論文ではあるが、ただし問題点がまったくないわけではないことも各審査委員から指摘された。

まず、史料の扱いに関してである。第一章の主要史料の「エクセンプラ」「奇跡譚」「異界探訪譚」、第二章の主要史料の「聖人伝」などは一種の教化文学でありバイアスがかかっているため、どこまで当時の人々の心性を反映しているか、にわか

に判定するのは難しい。たとえば聖女の背後には、助言者、伝記作者、聴罪司祭などの「男」がいる。ということは叫ぶ聖女についての発信者が男たちで、彼らがそのコミュニケーション回路に制度的に入り込んでいる訳であり、その記述はたんなる現実の反映ではなく、そこにはもろもろの力関係が張り巡らされている。それが作品になり、そのように書かれ残されているという事実のコンテキスト・力学を、時代と地域の中で明らかにできればさらに良かった、という指摘があった。

また、論文全体の土台としての第一章では、修道士を神に近い生き方をしていたとして特権化しているが、かならずしも修道士だけでなく、中世初期には司教も聖性の管理者として重要で、とりわけ司教の典礼定式書に触れるべきであったと指摘された。

さらに、古代以来、旧約の「荒野の声」をはじめとして〈叫び〉のパターンは各種あるが、それが中世に「再利用」されていくときの解釈の変化を、*Deus ex machina*のように靈性の変化ということですべて説明するのは、単純すぎるのではないか。より深く背景を探るべきだという指摘もあった。

ほかに、時代をもう少し細かく分けて移り変わりの様子を捉えること、ジェンダー史や地域史の観点をより多く取り入れること、〈叫び〉を表す各種のタームや聖女についての諸データなどを図表にして巻末付録に付けることなども、改善点として指摘されたが、これらは欠点の指摘というより、より良いものにするためのアドバイスである。

以上、いささかの改善の余地はあるが、それらは、本論文の独創性と学術的価値を損なうものではまったくない。斬新なテーマを扱い、多様な展開の可能性を持つ本論文は、西洋史学界全体に対して大きな貢献をする有意義な論文と見なすべきであるとの認識で、審査委員会は一致した。

したがって本審査委員会は、全員一致で本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。